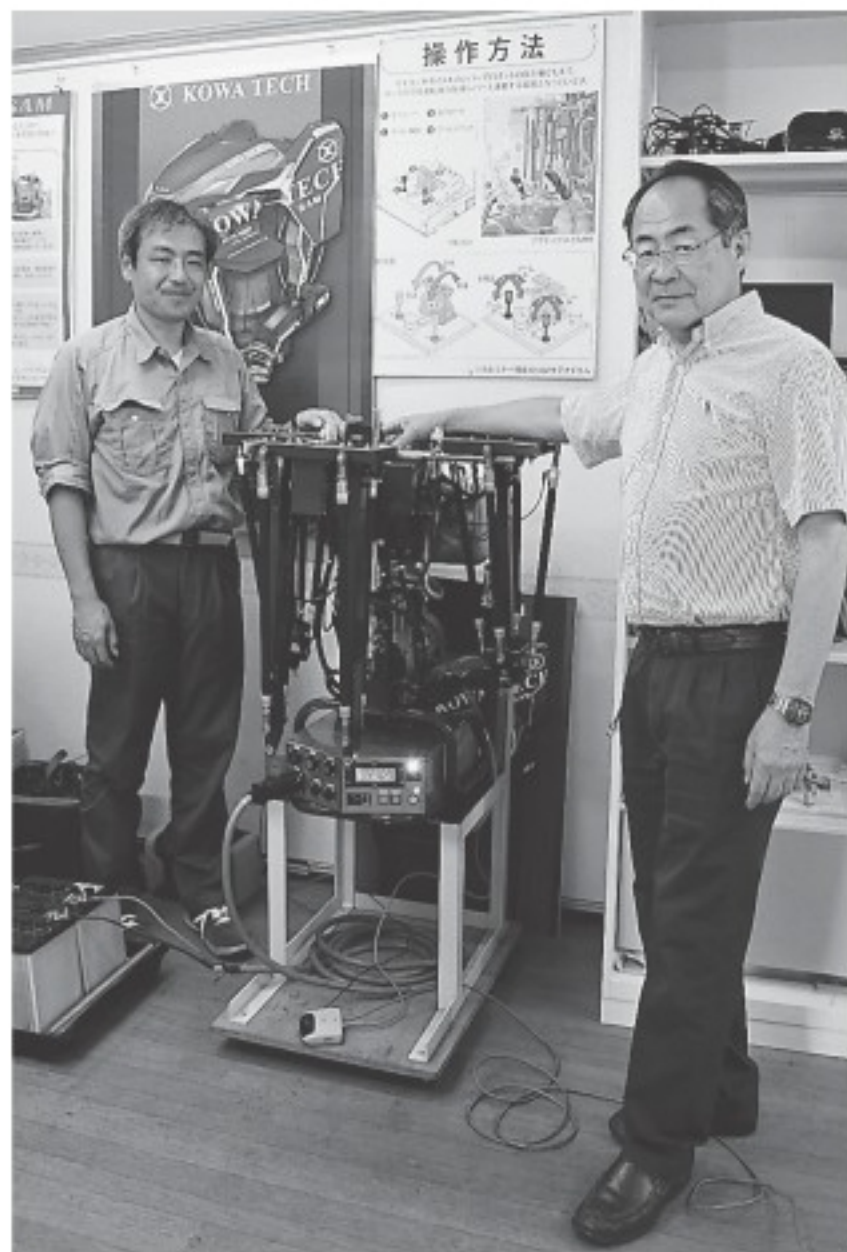


60代後半になっても仕事をしているシニアが、全体の半数近くに及ぶ時代となった。現役期に体得した専門性を生かしたり、新たな職に挑んだりしながら、定年後も社会性をもって、楽しく働きたい人が増えているようだ。少子高齢化の中で、シニアの力を活用したい企業の期待も高い。



一緒に開発した災害用ロボットを挟んで立つ牧野誠さん(右)と綿貫肇さん(左) 神奈川寒川町

定年後も働く楽しさを

神奈川寒川町の事業所で特殊車両などを開発している企業「コーワテック」。2014年から顧問を務めるのは、60歳でHondaを定年退職した牧野誠さん(65)だ。

自動車の製造ロボットや生産技術の開発をHondaで手掛けた牧野さんは、コーワテックで週に1、2日、災害用ロボットの開発に助言する。「今まで得た経験を若い人に伝えることができ、一緒に製品を作れる。とてもやりがいを感じます」

この開発の担当課長の綿貫肇さん(47)は「培ったノウハウを惜しみなく教えてくれる。本当にありがたいです」。

強みを生かし、経験伝授

自身は元々、車両設計が専門で、ロボットの制御など牧野さんに学ぶことは少なからずいそいだ。

牧野さんは定年後、Hondaの関連会社で働く選択肢もあった。だが「外の世界の人と接して、自分のスキルを中小企業に継承したい」とコーワテックで働き始めた。

社長の小栗裕治さん(53)は「零細企業なので開発は今まで自己流でやってきた。メーカーとしての基本的な考え方や開発システムを指導してもらい、社として底上げができます」と喜ぶ。

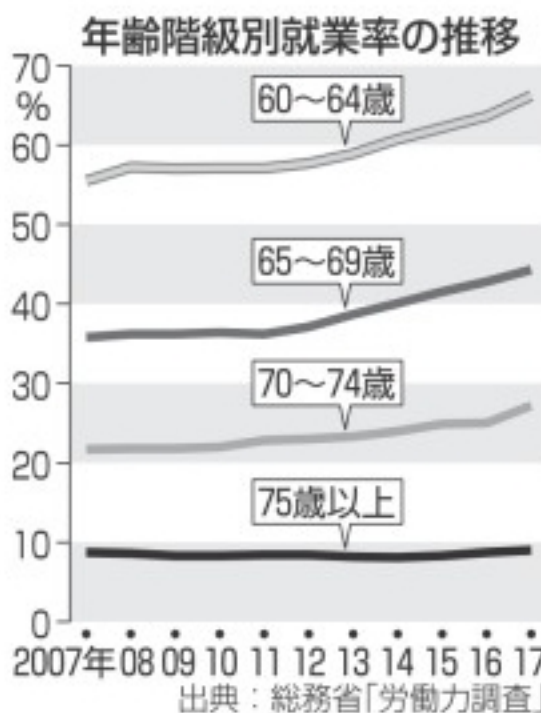
第二の人生で新たな業種を選択する人もいる。埼玉県所沢市の男性(67)は、公務員を60歳で退職後、介護職員初任者研修を修了。近隣の介護事業所で週5日ほど働く。仕事は、在宅の高齢者や障害者の介助だ。

「公務員で長年やった窓口業務などの仕事とは全く異なる分野で働いてみたかった。」

直接誰かの役に立てるヘルパーの仕事に、とてもやりがいを感じる。体力が続く限り、これからも頑張りたい」と楽しみに語る。

企業の課題解決の業務をやりたいシニアに仕事をあつせんする「サイエスト」(東京都港区)で、希望者の面接を担当する土井英嗣さん(72)は「リタイア直前の人が、人生の後半を考え、社会や企業に貢献したいと面接に来る傾向が強まっている」と話す。

労働意欲の高いシニアへの企業側の需要は増えているが、再就職で強みになるキャリアがある人もない人も、現役時代の成功や待遇にこだわらない姿勢が大切だという。仕事探して重要なのは「明朗で謙虚であること、相手企業の話に傾聴し、自慢話はしない、ITツールが使える、やりたいことが明確であること」と土井さんはアドバイスしている。



シニアの就業率 2018年版高齢社会白書によると、60~64歳の就業率は近年、上昇を続け、17年は約66%。65~69歳も約44%に達している。働く60歳以上の人を対象にした4年前の調査では、何歳まで

収入を伴う仕事をしたいかとの問いに「働けるうちはいつまでも」が約42%。「80歳くらいまで」と「75歳くらいまで」が計約16%いた。一方で「65歳くらいまで」は13%台だった。